

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22500572

研究課題名(和文) スポーツ発達心理学の構築に向けた基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental study for constructing Developmental Sport Psychology

研究代表者

竹之内 隆志 (TAKENOUCHI, TAKASHI)

名古屋大学・総合保健体育科学センター・教授

研究者番号：50252284

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中学・高校・大学スポーツ選手を対象者として、パーソナリティ(自我発達)と心理的競技能力の発達差について検討した。その結果、スポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力の発達水準は発達段階間で異なることが明らかになった。また、危機経験と心理社会的発達課題の達成がスポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力の発達に関連していたが、この関連の内容は発達段階間で異なることも示された。これらの発達差に基づいて、スポーツ選手の心理的課題の発達差を検討する「スポーツ発達心理学」という新学問領域の構築必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study examined developmental differences in personality (ego development) and psychological competitive ability with junior high school, senior high school, and university athletes. The results indicated there were developmental differences in the development level of athletes' personality and psychological competitive ability. Furthermore, although crisis experiences and achievement of psychosocial developmental tasks were related to the development of personality and psychological competitive ability, the content of the relationships between these variables was different, depending on the developmental stages. Such developmental differences indicate the need to construct a new field of study focusing on developmental differences in psychological tasks of athletes that is named as "Developmental Sport Psychology."

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学，スポーツ科学

キーワード：スポーツ発達心理学 スポーツ選手 パーソナリティ 自我発達 心理的競技能力 危機経験 心理社会的発達課題

1. 研究開始当初の背景

スポーツ心理学の研究では、発達的な観点から検討することが望ましいと思われる研究課題であっても、そのように扱っていない研究が多々みられる。例えば、スポーツ経験とパーソナリティ発達の関連については、発達段階によってスポーツ経験の質もパーソナリティの発達水準も異なるので、両者の関連は発達段階ごとで異なると考えられる。そこで、両者の関連を発達段階ごとに検討することが望ましいが、そうした問題意識で検討を加えたものはさほど多くないと思われる。こうした現状を打開するには、「発達」を研究の前提とした学問領域の構築が必要であり、「スポーツ発達心理学」の構築という着想に至った。この「スポーツ発達心理学」とは造語であるが、これまでスポーツ心理学領域で扱われてきた課題のうち、特に加齢に伴う発達的な変化を検討する学問領域を意味する。

スポーツ発達心理学で扱うべき課題は多数あると思われるが、本研究では、スポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力に着目し、これらの発達の特徴、およびこれらの発達に関連する経験を発達段階(中学期・高校期・大学期)ごとに明らかにし、スポーツ発達心理学の構築に向けた基礎的知見を集積しようと考えた。スポーツ選手の「パーソナリティ発達」を取り上げたのは、教育的な観点で重要度が高いためであり、「心理的競技能力」を取り上げたのは、競技成績に直結する重要な能力であるためであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の3点であった。

(1)スポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力の発達について、発達段階(中学期・高校期・大学期)ごとの特徴や発達段階間の違いを明らかにする。なお、本研究では、パーソナリティ変数として自我発達を取り上げた。

(2)個々の発達段階でのどのような経験がスポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力の発達に関連するのかを明らかにする。また、スポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力の発達に関連する経験は発達段階間で変化すると予想されるが、その変化を生じさせる理由についても検討する。

(3)上記(1)(2)を明確にした上で、発達段階間で異なっていたことを整理し、最終的には、発達段階を区切って検討する意義や必要性、すなわち「スポーツ発達心理学」の構築可能性について明らかにする。

3. 研究の方法

(1)先行研究(中込・鈴木, 1985 など)を参考として、スポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力の発達に関連する経験とし

て、危機経験(個人にとって意味のあるいくつかの可能性を選択しようと思ったり悩んだり、迷いや悩みを解決しようとする努力したり、自己の選択に対して関心を示し努力したりする経験)に着目した。そして、パーソナリティ変数として自我発達を取り上げ、大学選手を対象者として、運動部活動や日常生活での危機経験と自我発達との関連を検討した。なお、危機経験については、スポーツ選手が危機経験をしやすいと思われる13事象を設定して、それらの事象での危機経験を調査した。取り上げた事象は、チームメイトとの関係、指導者との関係、競技成績、競技継続、チーム運営、怪我、勉強、将来の職業や進路、生き方や価値、異性の友人との関係、同性の友人との関係、父親との関係、母親との関係であり、これらの事象を危機事象と定義した。また、自我発達は文章完成テスト(竹之内ほか, 2002)で測定した。その後、中学・高校選手を対象者として同様の検討を行った竹之内ほか(2006)の結果も加味して、スポーツ選手の自我発達に関連する危機事象を発達段階ごとに整理した。そして、自我発達に関連する危機事象の発達的な変化を明らかにし、その発達的な変化の理由を文献に基づいて検討した。これらのことで、目的(2)の達成を目指した。

(2)上記(1)で検討した発達的な変化の理由を念頭に置いた上で、改めて中学・高校・大学選手を対象者として調査を行った。調査内容は、自我発達ならびに心理的競技能力であった。自我発達は文章完成テスト(竹之内ほか, 2002)で測定した。心理的競技能力は診断検査(DIPCA, 徳永・橋本, 2000; 忍耐力・闘争心など12の下位尺度を含む)を用いて測定した。そして、発達段階ごとの特徴や発達段階間の違いについて検討した。このことは目的(1)の達成に資するものであった。

(3)上記(1)の検討の結果、「スポーツ選手の危機経験は心理社会的発達課題への取り組みの表れであり、それゆえスポーツ選手の自我発達や心理的競技能力の発達に関連する。そして、個々の発達段階で達成すべき心理社会的発達課題は異なるので、自我発達や心理的競技能力の発達に関連する危機経験や心理社会的発達課題も発達段階によって変化する」といった仮説が考えられた。この仮説の前半部分は、図式的には「危機経験 心理社会的発達課題への取り組み 自我発達・心理的競技能力の発達」と表現でき、仮説の後半部分は、この図式の具体的内容が発達段階間で変化することを示すと考えられた。そこで、これらのことを検証するため、運動部活動や日常生活での危機経験および青年期までに獲得・達成されるのが望ましいと考えられる心理社会的発達課題の達成度を(2)の調査と同時に調査した。具体的には、危機経験は、(1)に示した13の危機事象のうち「怪我」

を除く 12 事象について、過去の危機（個々の事象について迷ったり悩んだりした経験）と現在の自己投入（個々の事象を重視して努力している経験）の 2 つを調査した。心理社会的発達課題は、先行研究（安達ほか，1985；中西・佐方，1993；岡本・上地，1999 など）を参考として、信頼性、勤勉性、同一性、親密性、脱依存、男性性、女性性を取り上げて、それらの達成度を調査した。そして、仮説の検証として、危機経験と心理社会的発達課題の達成度との関連、および心理社会的発達課題の達成度と自我発達・心理的競技能力の発達との関連を検討した。さらに、これらの関連の具体的内容が発達段階間で異なるかどうかを検討した。このような検討を通して、目的(2)の達成を目指した。

(4) 最後に、自我発達と心理的競技能力の発達、そしてそれらの発達に関連する経験などについて発達段階間で異なっていたことを整理し、発達段階を区切って検討する意義や必要性を検討した。このことで、目的(3)を達成しようとした。

4. 研究成果

(1)方法(1)の結果

大学選手 386 名（男子 200 名，女子 186 名）を分析対象者として、運動部活動や日常生活におけるどのような事象での危機経験が自我発達に関連するのかを検討した。その結果と、中学・高校選手を対象者として同様な検討を加えた竹之内ほか（2006）の結果を加味して、まず、自我発達に関連する危機事象を発達段階ごとに整理した。次に、自我発達に関連する危機事象の発達の变化の理由を文献に基づいて検討した。その結果、以下のことが明らかとなった。

表 1 に示すような事象での危機経験が自我発達に関連していた。

表 1 自我発達に関連した危機事象

発達段階	運動部活動での危機事象	日常生活での危機事象
中学選手	チームメイト 指導者, 競技成績	勉強, 生き方や価値
男子 高校選手	チームメイト 指導者, 競技成績	職業や進路
大学選手	チームメイト, 競技成績, 競技継続	生き方や価値, 同性の友人
中学選手	チームメイト	生き方や価値, 同性の友人
女子 高校選手	チームメイト 指導者	職業や進路, 生き方や価値, 同性の友人
大学選手	チームメイト, 競技成績	勉強, 職業や進路, 生き方や価値, 異性の友人

表 1 より、自我発達に関連する危機事象の発達の变化の特徴として、以下の 5 点が考えられた。1) 中学・高校選手では「指導者」での危機経験が自我発達に関連したが、大学選手では関連しなかった。2) 中学選手において、まず「生き方や価値」での危機経験が自我発達に関連し、その後、高校選手になってから「職業や進路」での危機経験が自我発達に関連し始めていた。3) 「競技継続」での危機経験は、中学・高校選手では自我発達に関連しなかったが、男子大学選手では自我発達に関連した。4) 中学・高校選手では同性関係での危機経験のみが自我発達に関連していたが、女子大学選手では同性関係に加えて異性関係での危機経験も関連した。5) 「競技成績」での危機経験は、女子中学・高校選手では自我発達に関連しなかったが、女子大学選手では自我発達に関連していた。

次に、自我発達に関連する危機事象の発達の变化を生じさせる要因として心理社会的発達課題を想定し、個々の発達段階での心理社会的発達課題を論じた文献に基づきながら上記の発達の变化を検討した。その結果、自我発達に関連する危機事象の発達の变化と加齢に伴う心理社会的発達課題の变化が同期していることが確認された。例えば、青年期の発達課題の一つに、両親や両親代理への心理的依存の脱却があるが、指導者は両親代理に相当し、-1) に示した指導者での危機経験はこの発達課題への取り組みの表れと考えられた。この心理的依存の脱却は中学や高校頃に活発になることが示唆されているが（高橋，1989），このことと同期するように、「指導者」での危機経験は中学・高校選手の自我発達には関連したが、大学選手の自我発達には関連していなかった。1) 以外の危機事象の発達の变化についても、同一性の形成、親密性の獲得、性役割の内面化などの心理社会的発達課題を考慮して文献検討を行った結果、加齢に伴う心理社会的発達課題の变化との同期性が確認された。これらのことから、「スポーツ選手の危機経験は心理社会的発達課題への取り組みの表れであり、それゆえスポーツ選手の自我発達や心理的競技能力の発達に関連する。そして、個々の発達段階で達成すべき心理社会的発達課題は異なるので、自我発達や心理的競技能力の発達に関連する危機経験や心理社会的発達課題も発達段階によって変化する」といった仮説が考えられた。

(2)方法(2)の結果

中学・高校・大学選手計 549 名（男子 308 名，女子 241 名）を分析対象者として、自我発達ならびに心理的競技能力の発達について発達段階ごとの特徴や発達段階間の差を検討し、以下の結果を得た。

自我発達得点について分散分析を行った結果、男子では発達段階の効果は有意でな

かった。しかし、平均値は中学<高校<大学選手となっていた。また、年齢と自我発達得点には正の相関 ($r=.12, p<.05$) がみられた。女子では、分散分析の結果、発達段階の効果は有意であり、平均値は中学<高校<大学選手となっていた。これらのことから、自我発達は加齢に伴って促進すると考えられた。

心理的競技能力の下位尺度ごとに分散分析を行ったところ、男子では、忍耐力、闘争心、自己コントロール能力、リラクセス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力で発達段階の効果は有意であった。概して、中学・高校選手より大学選手の方が平均値が高かった。女子では、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲、集中力、自信、協調性で発達段階の効果は有意で、概して、中学選手よりも高校・大学選手の方が平均値が高かった。

心理的競技能力下位尺度のうち平均値の高かった尺度を調べたところ、協調性や闘争心、自己実現意欲はどの発達段階でも相対的に得点が高かった(表2に上位3尺度を得点の高い順に掲載)。しかし、それらの得点順位は男子では発達段階間で異なっていた。女子では、高校選手と大学選手のそれらの得点順位は同じであったが、中学選手と高校・大学選手では異なっていた。以上の結果より、自我発達と心理的競技能力の発達について発達段階ごとの特徴をまとめると、表2のようであった。

表2 自我発達と心理的競技能力の発達についての発達段階ごとの特徴

発達段階	自我発達	心理的競技能力	平均値の高い心理的競技能力下位尺度
男子	中学選手	低い	協調性, 自己実現意欲, 闘争心
	高校選手	中位	協調性, 闘争心 ^a , 勝利意欲 ^a
	大学選手	高い	闘争心, 協調性, 集中力
女子	中学選手	低い	協調性, 自己実現意欲, 勝利意欲
	高校選手	中位	協調性, 闘争心, 自己実現意欲
	大学選手	高い	協調性, 闘争心, 自己実現意欲

注) 自我発達と心理的競技能力は発達段階間の相対的評価

^a 平均値が同じであったため中央値の高低で順位をつけた

(3)方法(3)の結果

(1)で示された仮説の前半部分は、図式的には「危機経験 心理社会的発達課題への取り組み 自我発達・心理的競技能力の発達」と表現でき、仮説の後半部分は、この図式的具体的内容が発達段階間で変化することを

示すと考えられた。そこで、これらのことを検証するために、中学・高校・大学選手計549名(男子308名,女子241名)を分析対象者として、12事象の危機・自己投入得点と7つの心理社会的発達課題の達成度との相関、および7つの心理社会的発達課題の達成度と自我発達得点・心理的競技能力合計点との相関を性別・発達段階別に検討した。さらに、これらの関連の具体的内容が発達段階間で異なるかどうかを検討した。結果として、以下のことが明らかとなった。

危機得点と心理社会的発達課題の達成度との有意な相関については、どの発達段階でも、正の相関よりも負の相関の方が多かった。他方、自己投入得点と心理社会的発達課題の達成度との有意な相関については、中学選手と高校選手では負の相関よりも正の相関が多かった。このことは、高校選手では該当しなかったが、全体的にみて、自己投入は概して心理社会的発達課題の達成と正の関連を有すると考えられた。自己投入と心理社会的発達課題の達成との関連の内容は、発達段階間で異なる場合がみられた。例えば、男子中学選手では、競技成績での自己投入得点が同一性の達成度と正の相関を有していたが、男子大学選手では、競技継続やチーム運営での自己投入得点が同一性の達成度と正の相関を有していた。

心理社会的発達課題の達成度と自我発達得点との相関については、有意な負の相関はみられなかった。そして、表3に示すように、有意な正の相関は6個みられた。心理社会的発達課題の達成度と心理的競技能力合計点との相関については、男子大学選手で脱依存の達成度が心理的競技能力合計点と有意な負の相関を示したが、有意な正の相関は21個みられた(表3参照)。これらのことから、心理社会的発達課題の

表3 自我発達および心理的競技能力と正の相関を示した心理社会的発達課題

発達段階	自我発達に関連した発達課題	心理的競技能力に関連した発達課題
男子	中学選手	なし
男子	高校選手	なし
男子	大学選手	勤勉性, 同一性, 親密性, 男性性
女子	中学選手	勤勉性, 同一性, 男性性, 女性性
女子	高校選手	なし
女子	大学選手	なし

達成は、概して、自我発達および心理的競技能力の発達と正の関連を有すると考えられた。

心理社会的発達課題の達成と自我発達との関連は、発達段階間で異なっていた。表3に示されるように、男子においては、大学選手では、勤労性、同一性、親密性、男性性の達成度が自我発達得点と有意な正の関連を有していたが、中学選手と高校選手では有意な相関はみられなかった。女子においては、中学選手では、男性性と女性性の達成度が自我発達得点と有意な正の関連を有していたが、高校選手と大学選手では有意な相関はみられなかった。心理社会的発達課題の達成と心理的競技能力の発達との関連の内容についても、発達段階間で異なる場合がみられた。例えば、女子大学選手では、信頼性・親密性の達成度が心理的競技能力合計点と有意な正の関連を有していたが、女子中学選手と女子高校選手ではそれらの相関は有意でなかった。

と の結果より、「自己投入 心理社会的発達課題の達成 自我発達・心理的競技能力の発達」といった関連が明らかとなった。このことは仮説の前半部分を支持する結果と考えられた。また、と の結果より、自己投入と心理社会的発達課題の達成との関連の内容、および心理社会的発達課題の達成と自我発達・心理的競技能力の発達との関連の内容は発達段階間で異なることが示された。このことは、仮説の後半部分を支持する結果と考えられた。つまり、本研究の結果は、方法(1)の結果として提示された仮説(スポーツ選手の危機経験は心理社会的発達課題への取り組みの表れであり、それゆえスポーツ選手の自我発達や心理的競技能力の発達に関連する。そして、個々の発達段階で達成すべき心理社会的発達課題は異なるので、自我発達や心理的競技能力の発達に関連する危機経験や心理社会的発達課題も発達段階によって変化する)をおおむね支持する結果であったと考えられた。

(4)方法(4)の結果

以上の結果に基づいて発達段階間で違いのみに整理すると、以下のようであった。

自我発達得点と心理的競技能力の下位尺度得点

心理的競技能力の下位尺度の得点順位

自我発達に関連する危機事象

自己投入と心理社会的発達課題の達成との関連の内容

心理社会的発達課題の達成と自我発達・心理的競技能力の発達との関連の内容

これらの点で発達差がみられたことは、スポーツ選手のパーソナリティや心理的競技能力、ひいてはその他の心理的課題についても発達段階ごとに分析する必要性や有効性を

を示唆していると考えられた。つまり、そのような分析による知識の蓄積を目指す「スポーツ発達心理学」の構築必要性や意義が確認されたと考えられた。

(5)まとめ

本研究で得られた知見をまとめると、以下のようであった。

スポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力の発達の水準や特徴は発達段階間で異なっていた。

スポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力の発達には危機経験や心理社会的発達課題の達成が関連していたが、この関連の内容は発達段階間で異なっていた。これらのことから、スポーツ選手の心理的課題を発達段階ごとに検討したり、加齢に伴う発達のな変化を重視しながら検討したりする「スポーツ発達心理学」といった学問領域の構築の必要性が示された。

今後の課題としては、本研究で提示された仮説を量的・質的により厳密に検討し、スポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力の発達プロセスを明確にしていくこと、「スポーツ発達心理学」の研究内容や方法を明確にしていくこと、などが考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

竹之内隆志・奥田愛子・大畑美喜子、運動選手の自我発達プロセス:危機事象の発達の变化に基づく検討,体育学研究,査読有,57,2012,379-398.

竹之内隆志・奥田愛子・大畑美喜子、大学運動選手の危機経験:競技レベルによる違い,総合保健体育科学,査読無,34,2011,19-28.

[学会発表](計2件)

Takenouchi, T., Okuda, A., and Oohata, M. Experiences of crisis in Japanese college athletes. The 6th Asian South Pacific Association of Sport Psychology International Congress. 2011.11.13, Howard Civil Service International House, Taipei, Taiwan.

竹之内隆志・奥田愛子・大畑美喜子、運動選手の危機経験と自我発達:危機事象の発達の变化,日本スポーツ心理学会第37回大会,2010.11.20,福山大学社会連携研究推進センター,広島.

6. 研究組織

(1)研究代表者

竹之内 隆志 (TAKENOUCHI TAKASHI)

名古屋大学・総合保健体育科学センター・教授

研究者番号：50252284